

	所属 文学研究科史学専攻日本史学専修博士後期課程3年
--	-------------------------------

研究課題	明治維新时期における加藤桜老の動向とその再評価
------	-------------------------

研究成果報告（申請時の研究目的に基づいてどのように調査・研究を行い、どのような成果が得られたか、課題として残されたことは何か、支出の特徴についても触れる。また、今回の研究成果について公表する予定がある場合には、そのことについても記載すること。）

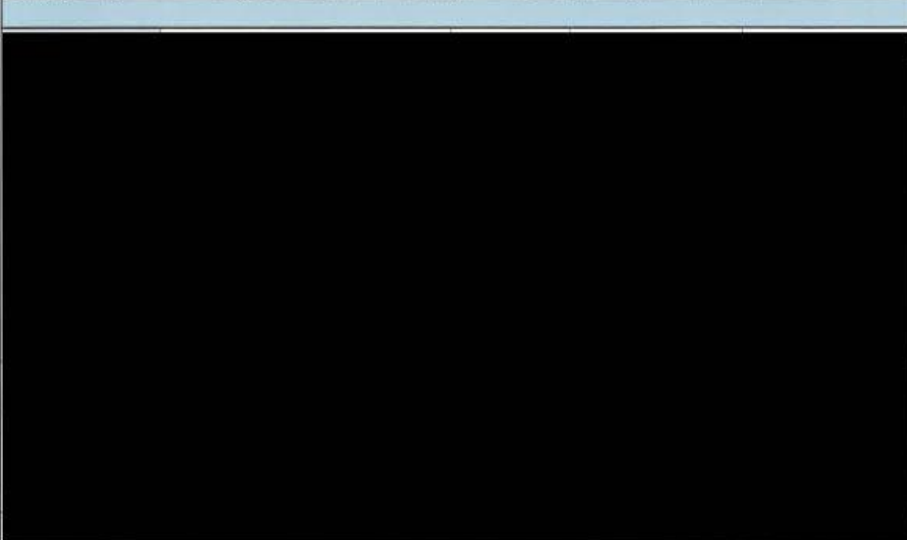
本報告書は「2025年度文学研究科歴史学教育振興資金助成金」の使途についての詳細と成果を記すものである。本助成金に課された研究課題解決のため、申請者は2025年8月14日に史料調査を実施した（@八戸市立図書館）。なお、八戸の宿泊施設の予約が叶わなかったため、盛岡の宿泊施設に前泊し、明朝の新幹線で史料所蔵機関へと赴いている。

この史料調査では従来その存在が確認されてこなかった「学問々答」の調査にあたった。本史料は笠間藩儒である加藤桜老（有隣）の著作であり、「大学校」の設立を説く同人の教育論を解き明かすにあたり、重要であると考えられる。なお、本史料は全体として学問を修める目的とその方法論が記されているのが特徴であるが、奥付に「志乃写」とあることから複写と思われるため、その点留意が必要である。それでは上記の研究課題を踏まえ、下記に当該史料の特筆すべき内容を確認していきたい。

そも、加藤は初めに学問とは「人タル道ヲ教学事」にその主眼があるものとする。また、「詩書ノ教」だけでなく「礼楽ノ道」を修めることが重要と述べ、今様を修めることを皮切りにして、音楽の道に通じるべきであるとしている。以上の記述については、青山英正の指摘の裏付けとなる。すなわち、青山は「今様を教育にふさわしいものと見なし、そのアンソロジーを編んだのも、唱歌教育確立に向けた官民による試行の一環」（青山英正「七五調の幕末・明治」、『幕末明治 移行期の思想と文化』、2016年）と指摘しており、明治期以降の加藤の教育（観）にとり音楽は重要な存在であったのである。

一方、「洋語洋学ニ入レハ必ス破竹ノ勢」があり、「外道ニ踏ミ入ルノ愚アルコトナク」と述べている点も着目される。加藤は幕末期に「夷狄の兵勢」に抗するために海軍制度の充実を志向していたが（拙稿「幕末期における加藤有隣の歴史的評価について」『山口県地方史研究』131号、2024年）、明治期以降になると西洋の思想を柔軟に取り入れるようとする姿勢への変化を見ている。このような変化は加藤の中における世界観が変化したことを示しているに他ならない。

『榊陰年譜』（加藤の日記）において、その動向は明治3年（1870）までしか確認することができない。そのため、今後はその他にある加藤の著作の内容を引き続き分析することが求められるだろう。最後になったが、史料調査にあたっては小池祐賀子氏（八戸市立図書館）のご厚遇を賜った。記して謝意を表したい。



	所属 文学研究科史学専攻日本史学専修修士後期課程2年
研究課題	駿台史学会以前——戦前期・文科専門部時代の明治大学史学科
<p>研究成果報告（申請時の研究目的に基づいてどのように調査・研究を行い、どのような成果が得られたか、課題として残されたことは何か、支出の特徴についても触れる。また、今回の研究成果について公表する予定がある場合には、そのことについても記載すること。）</p> <p>【支出内訳】支出はA:書籍代、B:複写料金に大別できる。以下、下記「支出報告」欄に付した番号に従い、Aから支出の意義を概観する。①②は大学の史学科や史学科で活躍する教員を対象とした論集であり、本研究の方法論的基盤を構築するために不可欠であった。③④⑤は明大文科専門部の制度的沿革や史学科カリキュラムの詳細を把握するためのみならず、現時点で最新の明治大学史における文学部の位置づけを確認するための基本資料である。⑥は、明大史学科を卒業した生徒の進路を追跡する必要から生じた支出である。Bもまた、卒業生徒の進路追跡のために支出したものである。この複写は業者への依頼を余儀なくされ、費用がかさむこととなった。</p> <p>なお、当初予定していた駿台新報の全頁複写は断念した。代替として、史学科に言及される箇所を事前にメモしたうえで、当該箇所から落とされてきた記事を拾うことができ、駿台新報を通して史学科の新たな情報を発見した。</p> <p>【調査の内容と成果】申請者は研究計画時点で、3つの方針を立てた。A:『明治大学史学会』の活動分析、B:『史学研究室日記』の調査、C:卒業生の特定と進路の追跡、である。最も優先的に取り組み、かつ成果が得られたのはCであった。A・Bには支出していないため、以下ではCの報告に重点を置く。</p> <p>A:1933年11月から1938年5月までの会報全5号・ニュース約40号分の目次と引用のデータベースを整備した。あわせて史学会活動年表を作成し、会則の変遷と会の動向を把握した。具体的には、「明治大学史学会」から「明治大学生徒史学会」への名称変更や、「自主的・自発的精神」を掲げた生徒主導運営への移行過程を跡づけた。B:『史学研究室日記』は全8冊が現存するが、時間の制約により、翻刻を終えたのは2冊（1932～34年の記録）にとどまった。</p> <p>C:明大史学科を対象とする本研究の歴史学的意義を強く打ち出すために、卒業生たちの進路や活躍を具体的に把握する必要がある。したがって本段階から着手した。1935～38年の卒業生は、従来その氏名すら特定されていなかった。しかし『明治大学一覽:付・卒業生年度別』（1937年版）と『駿台新報』の記事を用いることで、全卒業生58名の氏名の特定に成功した。さらに国立国会図書館や『東京大学史料編纂所史料集』等を駆使して、可能な限りで卒業生の集団人物誌（プロボグラフィ）を作成した結果、教員三名の人脈を通じた歴史研究機関への組織的な人材供給の実態が明らかになった。その三名とは文科専門部長・尾佐竹猛、史学科長・渡辺世祐、史学科幹事・松崎実であり、史科生は彼らを媒介として、歴史学界で活躍していたのである。</p> <p>こうした発見は、従来の帝国大学中心の史学史が看過してきた、私立専門学校出身者による歴史学界への貢献を可視化した点で、本研究の最も重要な成果といえる。今後の課題は、明大史学科で行われた教育の様相を、史学会の動向と絡めて具体的に解明することとなる。これはA・Bを引き続き進めることで達成しうる。</p>	
支出報告	

所属

文学研究科史学専攻西洋史学専修博士前期課程2年

研究課題 前4世紀デルフォイにおけるポリス共同体の実態と変容—聖域の空間分析を中心に—

研究成果報告（申請時の研究目的に基づいてどのように調査・研究を行い、どのような成果が得られたか、課題として残されたことは何か、支出の特徴についても触れる。また、今回の研究成果について公表する予定がある場合には、そのことについても記載すること。）

【研究目的及び調査・研究方法】

本研究の目的は、前4世紀デルフォイにおけるポリス共同体の実態とその変容を、主に聖域の空間分析を通じて、解明することであった。デルフォイのポリスは、ギリシア世界で最も権威のあった神託とその聖域にギリシア各地から為された奉納物の陰に隠れ、注目されることは稀であった。1990年代以後のポリス観の見直しにより中小ポリスの研究の必要性が明らかとなると、デルフォイのポリスも研究対象となったが、その際に用いられたのは主に碑文であり、その聖域空間は分析されてこなかった。そこで本研究では、H.ルフェーブルによって提唱された空間論を歴史学に応用し、デルフォイのアポロン神域及びアテナ神域内に設置された奉納物や建造物が、デルフォイ人やデルフォイ人ではない参拝人にどのように認識され、どのような社会的・象徴的意味を持っていたのかを、実地調査を行った上で視覚的・空間的に分析した（この実地調査のためにギリシアへ遠征した際の飛行機代の一部に本研究費を使用した）。さらに、この作業によって明らかになった状況と碑文が示す状況を比較し、当時のデルフォイの社会を再検討した。

【研究成果】

本研究の結果、前4世紀にデルフォイのポリスにおいては国政が民主的に整えられたが、その中で有力市民は影響力を高めるために聖域を利用し、またポリス共同体は一体性を高めるために聖域を利用したことが明らかになった。

まず、空間分析から、個人が為した奉納物はデルフォイ人の移動経路からはよく見える、または頻繁に視界に入ることがわかった。これは奉納を為した有力市民が民衆に見られることを念頭に奉納行為を行っていたことを示している。彼らは奉納行為を通じてポリスにおける社会的地位を向上させることに務めていた。

次に、ポリスが為した奉納・建造物は全て参拝人の移動経路から見やすい場所に位置していた。これはポリスとしては奉納・建造物を参拝人に視覚的に呈示することで、その威信を対外的に誇示すると同時に、共同体内部の結束を強化する意図を有していたことを示している。

最後に、碑文からは、デルフォイの民主化志向が読み取れた。ポリスの下部組織であったラビュアダイが前4世紀初頭に建立した碑文に刻まれた決議は、有力者が務める役職の権限を制限し、それを全全員が参加可能な集会に与えていた。また、前4世紀後半において特定の人物がポリスの役職を再任することは稀であったことから、有力者による役職の独占は不可能で、かつ多様な人々が役職についていたことがわかる。しかし、空間分析によって明らかになった状況と突き合わせて考えるのであれば、実際に政治に影響を持っていたのは有力者であったというべきである。彼らは直接権力を行使することはできなかったが、民衆に対して働きかけ名声を高め支持を得ることで、政治を主導していたのだろう。

以上の成果は学会報告として発表した（森倉健斗「前4世紀におけるデルフォイのポリスと聖域空間」九州西洋史学会若手部会、ZOOMオンライン、2025年11月30日）。

【今後の課題】

本研究は、ポリス・デルフォイ内部の実態と変容を明らかにした。しかし、デルフォイはギリシア世界で最も権威のある神託所を聖域に抱えており、またその聖域の管理もアンフィクティオニアと呼ばれる宗教同盟によって為されていた。それ故、このポリス内部の変容がどのように、そしてなぜ起こったのかという問題は対外状況と合わせて検討する必要がある。今後の課題としたい。

支出報告

文学研究科歴史学教育研究振興資金助成金報告書	2026年 3月 16日
	所属
	文学研究科史学専攻日本史学専修博士前期課程1年
研究課題	薩摩藩島津家の公家社会との関わり
研究成果報告	(申請時の研究目的に基づいてどのように調査・研究を行い、どのような成果が得られたか。課題として残されたことは何か。支出の特徴についても触れる。また、今回の研究成果について公表する予定がある場合には、そのことについても記載すること。)
	<p>まず、調査・研究については、先行研究と史料を重点的に扱い、本学図書館所蔵の論文および刊行史料を参照した。具体的には、薩摩藩の政治史に関する先行研究(原口清「幕末政局の一考察」『文久二、三年の朝廷改革』(原口清著作集1 幕末中央政局の動向)、岩田書院、2007年、141—184頁)所収、高橋秀直「長州藩の朝幕一体化構想」(2003年初出)、「島津久光の率兵上京と尊攘論の台頭」、「尊攘論時代の開幕」『幕末維新の政治と天皇』(吉川弘文館、2007年)所収、町田明広『幕末文久期の国家戦略と薩摩藩:島津久光の皇政回復』(岩田書院、2010年)、野村晋作「島津久光の東上と近衛家の対応」『鹿児島地域史研究』(第8号、2014年)、薩摩藩と朝廷・公家社会との関わりに関する先行研究(久保貴子「『基熙公記』にみえる公家と大名」、瀧澤武雄編『論集 中近世の史料と方法』(東京堂出版、1991年)所収、井上勝夫「幕末公家の政治空間」、笠谷和比古編『公家と武家Ⅱ「家」の比較文明的考察』(思文閣出版、1999年)所収、清水善仁「江戸時代の縁家について」『中央史学』(第28号、2005年)、千葉拓真「近世後期の公武間交際」、朝暮研究会編『論集 近世の天皇と朝廷』(岩田書院、2019年)所収)を複写した。史料においては、徳川幕府側の史料(「脇坂安宅日記鈔」、近世災害研究会編『嘉永七年京都大火・安政度内裏造営関係資料:立命館大学グローバルCOEプログラム歴史都市を守る「文化遺産防災学」推進拠点平成22年度報告書』(立命館大学、2011年)8頁—65頁)を主に複写した。</p> <p>次に、成果については、薩摩藩の政治行動に関する研究史を整理するとともに、修士論文執筆にあたって、新たな論点を打ち出せることができた。具体的には、公家社会との関わりに関する先行研究を読んでいく中で、薩摩藩が積極的に中央政局に乗り出せた背景には、近世にわたって築きあげてきた公家社会とのパイプが大きな要因となりうるのではないかという視点を持つことができた。</p> <p>最後に、課題については、主に3点挙げられる。2点目は、先行研究と史料の複写のみに徹してしまったことである。今年度は、一度だけ私費で名古屋市にある蓬左文庫に史料調査をしに行ったが、金銭的な都合のため十分な史料調査ができなかった。そのため、今後は積極的に史料調査に赴くためにも、より計画的に研究を進めていかなければならないと考えている。2点目は、コピーカードが突然使えなくなり、故障してしまったことである。その原因を特定することができなかったが、おそらくは私の管理の仕方に問題があるように思われる。そのため、今一度管理の仕方を見直していきたいと考えている。</p>
支出報告	